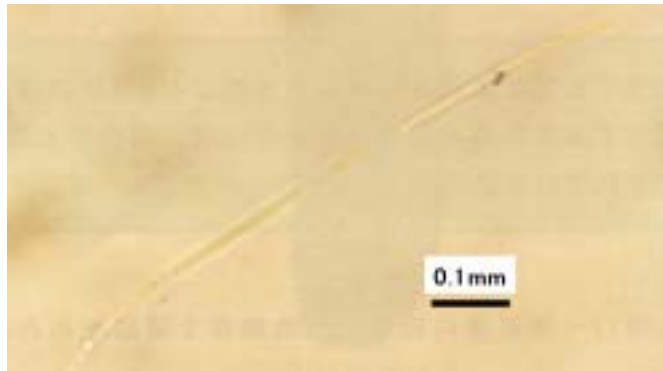
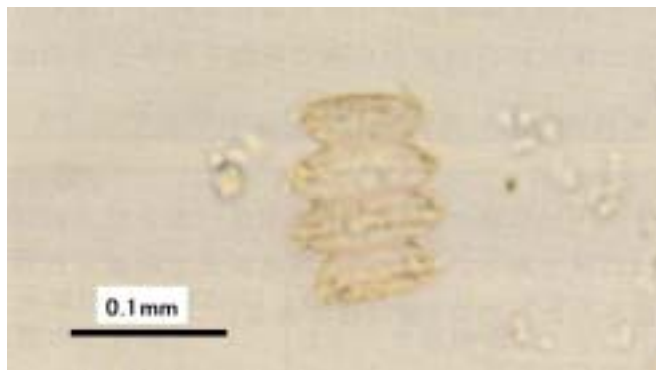


## 吉野川の付着藻類

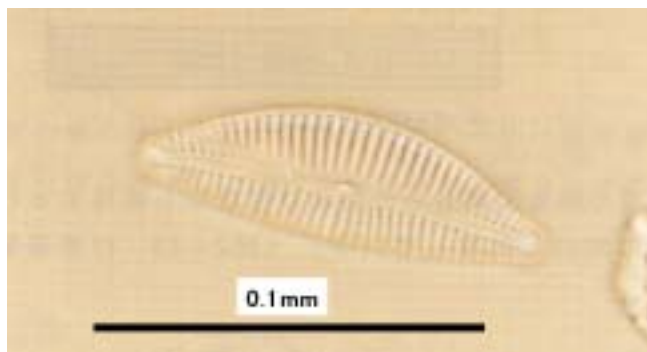
水中の植物としては、クロモなどの沈水植物もみられますが、その主役は付着藻類です。付着藻類は水中の岩や石礫、動植物等の表面に付着して繁茂する藻類で、主に珪藻、藍藻及び緑藻で構成されています。付着藻類は、アユを始め、多くの魚類や底生動物の餌として利用されています。



藍藻の例 (サヤユレモ)



緑藻の例 (イカダモ)

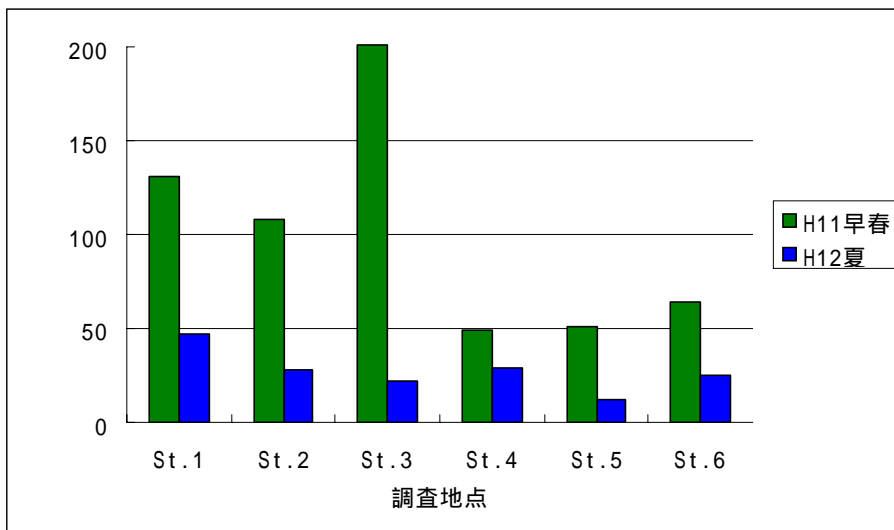


珪藻の例 (クチビルケイソウ)

一般に、冬は最も付着藻類の現存量<sup>げんぞんりょう</sup>が低く、春から秋にかけて水温と日照の十分な期間には高い値を示します。しかし、日本の河川では、洪水が起こるなどして流量の変化が著しいため、付着藻類の現存量も出水のたびに大きく変動します。

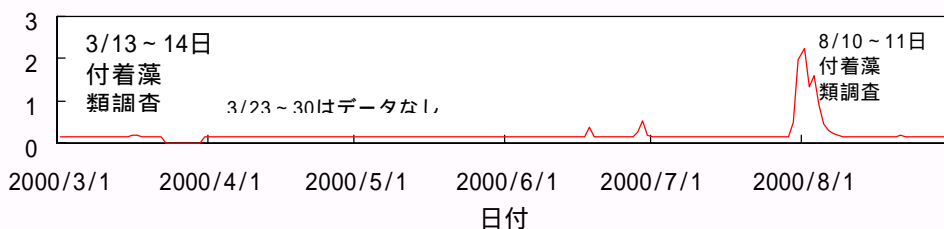
吉野川で調査した結果を以下に示します。調査は6地点で行いました。強熱減量<sup>きょうねつげんりょう</sup>の季節変化をみてみましょう。調査の結果は、夏よりも早春の方が大きな値を示しています。これは洪水が原因と考えられます。一般に、付着藻類の量は、早春よりも夏の方がたくさんあります。

\*試料の乾燥重量に含まれる有機物の総量を示すもので、藻類の現存量の指標の一つ。



強熱減量の季節変化

早春に比べ、水温と日照が十分な夏が低い値を示している理由としては、洪水によって石が動いたため、石の表面の付着藻類が洗い流された可能性が考えられます。次の図から、調査日が確かに夏の出水後になっています。



水位の変化

陸上の植物と同様に、水中の植物も攪乱による影響を受けます。梅雨や台風の影響を受け、毎年数回の出水が発生することを考えると、水中の攪乱は陸上の攪乱よりも高い頻度で発生していることが予想できます。